

女性問題学習の方法

「話しを聞くだけじゃ変わらない、動かなければ始まらない」

藤沢市教育委員会 社会教育主事 秦野玲子

(水戸生涯学習センターでの講義概要 他) 1998年

1 女性問題を解決する基本

女性自身が解決にむけて必要な価値観や力量を持った「自分」をつくること

① 女性問題がみえてくる力をつける

15年前とは違って、一応男女雇用機会均等法や戸籍法の改正など、あからさまな差別が見えない現代、女性問題を意識しなくても暮らせてしまう。

→自分自身のなかにある性差別意識を知る (内的女性問題)

「うちの夫の上司が女性だとなんかいやだわ」

男の人にお茶を出されて

「あら、男の方にこんなことしていただいて」 などなど

② 男女平等感を育てる

性別役割分業観から自由になる。そのうえに、平等観をつみあげていく

→社会の中の性別によるらしさの決め付け=ジェンダーを知り、そこから自由になる

③ 自立する力を育てる

女性の経済的自立、男性の生活的自立。そして女性は内なる女性問題を見据えて精神的自立を！ 自分と社会を結びつけてどらえる力をつける。

④ 「関係の中での自立」の力を育てる

人間関係の中で育つ力。夫との関係、こどもとの関係、友人との関係。

ひとりひとりの個性を、個人にとってもグループにとってもプラスになる人間関係を育てる。

⑤ 社会づくりに参加する力を育てる 1～4をふまえてできること！

2 「知ってるだけの女性問題学習」ではくらしは変わらない

これまでに多かった女性問題学習

- ・講師を並べて話しをしてもらうプログラム →啓発、生き方のお手本を知る。

これは「いいお話を聞いたわ」で、帰ると忘れてしまう。

「あの人だからできるのよね、わたしなんてとても」

- ・講師が問題を整理して話し合いをすすめる

→自分の考えが整理されたような気になる。

田島陽子のように元気のいい人が、男性中心社会の理不尽な点を指摘してしゃべるとそれまでのつかえがとれたような気がして、問題が解決したと錯覚する

*知識を持つてる人は増えても、実際に行動する人に結びつかない。

だから問題の解決は進まない！

性差別は日常の中にしっかりはいりこみ根を張っている。

その中でそれを問題にすることは今までの自分の意識や暮らし方を、ある部分否定することになる。

自分を否定することはつらい … 受け入れられない

「フェミニズムなんて勉強しても、つらくなるだけ。しらないでいたほうが良かった。」

くらしを変えていく力はどうしたらつく？

3 「行動し解決する女性問題学習」へ

- ・知る→認識する→行動する は、この一方通行だけではない。

行動しながら認識し、さらに知ろうとする学びもあるはず

- ・共通の立場にある人が共同して学習することが効果的
- ・女性問題は私たちのまわりにどのように表れているか

それはなぜか

女性をとりまく外側と女性自身の意識による内側の両方を、社会の仕組みと関連させて捉える

*自分自身のくらし、経験と結びつけることで認識が深まりさらに解決していく行動につながる

… ということから「体験型学習」「共同作業型学習」を実践してきた。

4 「話しを聞くだけじゃ変わらない、動かなければ始まらない」

(1) はじめに

94年、95年、六会女性セミナーは、この言葉をキャッチコピーに学級生を募集した。

ここであえて「受講生」といわず「学級生」という言葉を使うのも、実はこれから紹介するように「講義を受ける」のではない学習を進めたからである。

女性たちは、多くの力をもちながら、それを発揮できずにいる。

公民館の学習でも、承り ではない自分たちの手で創り上げていく学習と、持っている力を発信する場所と方法が必要な時期にきているのである。

何が問題なのか、その問題がどこからきているのか、解決するために何をしたらいいのかを誰かに教えてもらうのではなく、自分たちが学習する中で見つけだし、くらしを、社会を変えていく動きにしていく。

そういった学習こそが公民館の目指す「自己変革につながる過程」を大事にする学習なのではないかと思う。

しかし、こうした学習に慣れていない方たちも多いので、どう進めると効果的か、と、色々工夫をこらしてみたことをここでは紹介しようかと思う。

(2)「講義を受ける学習」から「創る学習」へ

六会公民館では94年から、講義を聞くだけでなく、自分たちで行動する中で学習を深めていく方法を女性セミナーに取り入れた。

- ①女性をとりまく環境や女性自身の意識、社会構造の問題点等に自ら気付くこと。
- ②意見を交わすこと、文章をまとめる作業をとおして、女性がこれまで獲得する機会を奪われてきた能力を身につけること。
- ③達成感を得にくい女性問題学習であるが、自分たちの学習成果を発表することで、学習段階が確認でき、達成感も得られること。

つまり、受け身の学習では得られない、体験学習ならではの成果をめざしたものである。

①94年六会女性セミナー事例

'94六会女性セミナーでは、調査をとおして女性問題を考える学習に取り組んだ。

集まったメンバーがそれぞれに関心のあること、問題と思うことを出しあい、テーマを決め調査票をつくり、回収したアンケートを分析し冊子にまとめる、その過程そのものを講座にしたものである。

講師は統計学者ではなく、「WIFE」編集長の田中喜美子さんに助言者として、3回来て頂き、あとは学級生と公民館職員とで、学習した。

その時の学級生は、介護や2世代の同居にまつわる問題に興味があったので、親世代、子世代それぞれが、同居や介護に関してどう考えているのか、また、長男の妻と2～3男の妻とで意識に差があるかを調査してみた。

その成果を「いまなお残る長男の妻に期待される役割＝同居と介護のアンケートから」という冊子にまとめたのだが分析し、コメントをつける過程で、相続の問題や介護、そしてそれを支える制度などを調べ合うことになったり、なくなったはずの家制度が、人々それも、長男の妻自身の中にしっかりと意識として根強く残っていることに気付いたのだった。

そして講座終了後、さらに介護にまつわる制度を自分たちで学習しあっていた。

②95年六会女性セミナー事例

'95女性セミナーでは、社会的につくられた男性役割、女性役割（ジェンダー）を学習し学級生がこれまでの人生の中で選択してきたことと、そのバックグラウンドになるものを話し合いながら整理していく内容にした。

そして、自分たちの経験の、ちょっぴりの後悔と反省から、「もっと早く、学生のうちに、先を見通して、自分の人生の転機に、自分の意志で進む道を選択すればよかった。それを後輩に伝えたい。」ということになり講師の話と自分たちの体験を交え、若い女性へのメッセージをまとめることになった。

この学習の成果が、「いまからはじめるライフデザイン=ちょっと先輩からのメッセージ」という冊子である。

チャートをたどると「結婚しても働き続ける」「子どもができれば仕事をやめる」等、8つのタイプに分かれ、そのタイプごとに問題点や、そのタイプを生きている人のコメントが掲載されているもので、これから仕事を選ぶ女子大生、短大生を対象に300部ほど配布した。

この学習では、自分の選択してきた生活と選択の基準、そして現在の暮らしを客観的に見直すことができ、少しずつ暮らし方を変える原動力になったようだ。

また、イラストを描いたり、校正をしたり、と、日頃の専業主婦の生活では埋もれている能力を発揮する機会ともなった。

③ 96年六会女性セミナー事例

'96女性セミナーでは、何か始めたいと思っている専業主婦が、その夢を明確に形にするための助けになる学習を、と考案起業のシミュレーションを学習にしてみた。

実際に起業するには失敗を考えると勇気がいるが、机上でやることで、自分の今抱えている問題点が整理できたり、様々な女性問題も見えてくるのではないかと思ったのである。学級生がそれぞれの夢を語り、その中からケーキやさんを始めるというモデルケースを選び講師から、女性が働くことの様々な問題や、起業に関するノウハウ、税金対策等の講義を受けた。

その後実際に資金ぐり、店舗契約、立地条件、家事を外注する値段など、それぞれが調べ発表しあい、その問題点を整理した。

そうするうち、制度としての女性問題と自分自身の意識の中の女性問題に気付き始め、そうした点を講師から助言をもらい何か始めようとする人に役立つ手引書を作ることになった。

大人だって「これからなりたい自分」をあきらめないで生きたい。そういう想いを学級生同士、互いに応援しながら、自分の将来の10年計画をたて、資金面や家族との関係、自分の意識の壁をどう乗り越えていくのか課題別に整理してみた。

そして、大人のための成長日記「輝くあなたをみつけよう」という冊子ができたのである。

④ 97年六会女性セミナー事例

'97六会女性セミナーは、再び調査票をとおしての学習をした。

ジェンダーメッセージを大人が無意識に子どもに伝えているのではないか。

どんなふうに、どんな言葉で伝えているのかを、調査、集計、分析する過程で、ジェンダー日常に根付いているジェンダーを認識してみようというものだった。

しかし、調査するという形をとっていながら、学習者は「自分ではジェンダーにとらわれていなかったはずなのに、無意識のうちにジェンダーがあることに気付いた」という結果が得られた。

できあがった冊子「ボクだってままと、ワタシだってヒーローごっこ、でもね=おとうさんおかあさんが伝えるジェンダー」は、調査結果そのものだけでなく、学習の過程で学級生が気付いたことを綴った文章に、価値があると思う。

5 創る学習の課題

このように、決まったプログラム、講師を並べた学習でなく、参加し学習そのものを共同作業で創っていくという方法は、1回1回、次がどうなるか、どうしていけばねらいに辿り着くのか、手探りしながら進めなければならないし、場合によっては講師を予定していた回までに、作業が進まず、かといって無理遣りこじつける訳にもいかず、講師の日程を急遽変更してもらおう事態も出てくる。(事実、六会でも毎年それをやっていた。)

担当者にとっても、参加する学習者にとっても、大変なものであるといえる。しかし、その大変さを差し引いてあまりあるほどその楽しさと学習者が力をつけていくことへの手応えも大きい。

作業している間はもちろん、その人間関係を創っていくまでに、チェックシートを利用してみたり、自己紹介カードを創ったりと公民館ならではの学習方法を工夫できる。

何より、学習者自身が持っている、活用しそこねている様々な力（計算が早い、イラストがうまい、字がうまい、リーダーシップがあるなど）を見付けだし、無理強いせず、しかし楽しみつつ仲間の中で発揮してもらえるよう、学習者の動きを創ることを、これからの女性問題学習にぜひ、取り入れてほしい。